

「手伝ってくれる人は？」

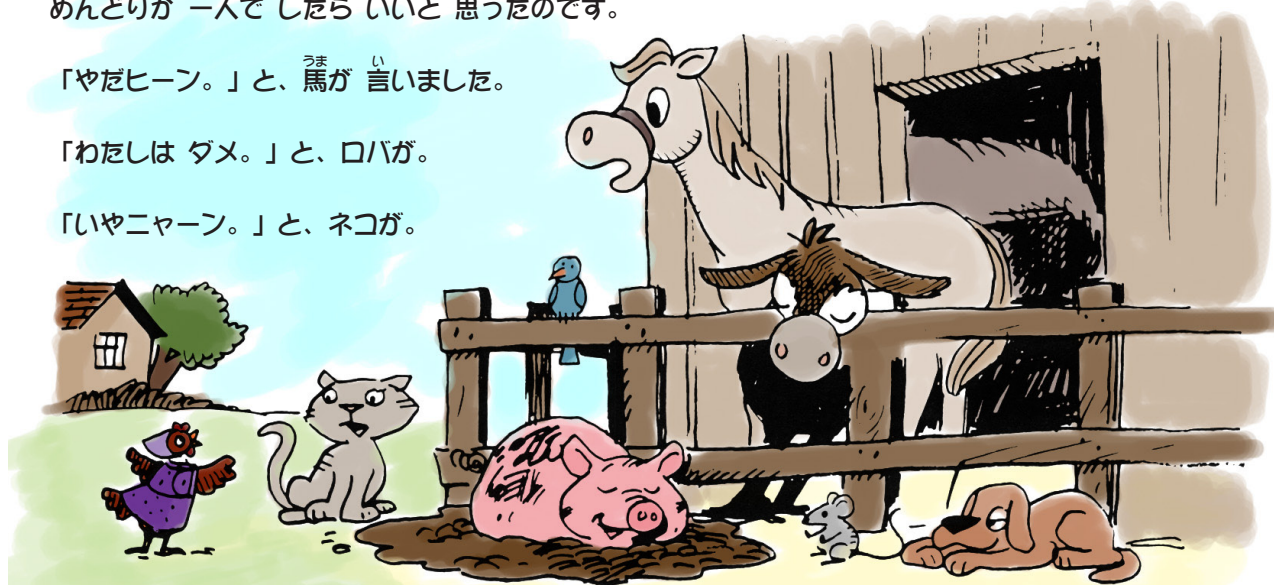
ある晴れた春の日のこと。めんどりのレッドさんは、麦を植えることにしました。そこで、動物たちが休んでいる納屋へ行き、羽をバタバタさせながら大きな声で言いました。「今日は、とってもワクワクしてるの！春になったら麦を植えようと、冬の間、ずっと待っていたのよ。麦の種を植えるのを手伝ってくれる人はいないかしら？」

納屋の動物たちは暖かい日を楽しんでいて、だれも仕事をしませんでした。それで、めんどりが一人でしたらいいと思ったのです。

「やだヒーン。」と、馬が言いました。

「わたしはダメ。」と、ロバが。

「いやニヤーン。」と、ネコが。

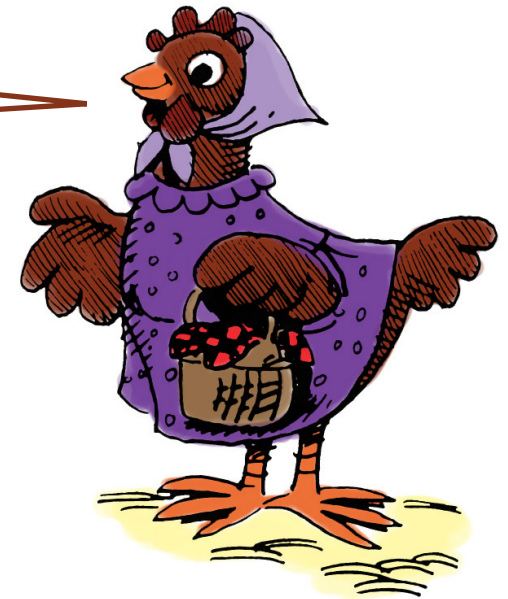


「いそがしいブー。」と、ブタが。「いやでチュー。」と、ネズミが。「やだワン。」と、犬も言いました。

「分かったわ。じゃあ、わたし一人で植えるわ。」と、レッドさんが言いました。

種を植えた後は、水やりをし、虫を取ったり生えてきた雑草をぬくなどして、めんどりはせっせと麦の世話をしました。しばらくすると、とうとう最初の芽が地面から出てきました。レッドさんは大喜びです。夏も終わりにさしかかるころには、麦が豊かに実っていました。

「この麦を全部収穫するのは大仕事ね。納屋の動物たちに手伝ってもらえないが、たずねてみましょう。」と、レッドさん。



けれども、今度も納屋の動物たちは「いやだよ。」と言いました。それで、レッドさんは一人で麦を収穫しました。

むぎの たばを ぜんぶ あつめると、レッドさんは また 納屋に 行きました。
「脱穀するのは 大仕事なの。だれが、手伝って もらえないがしら？」

「したくなヒーン。」と、馬が 言いました。

「わたしも ダメよ。」と、ロバが。

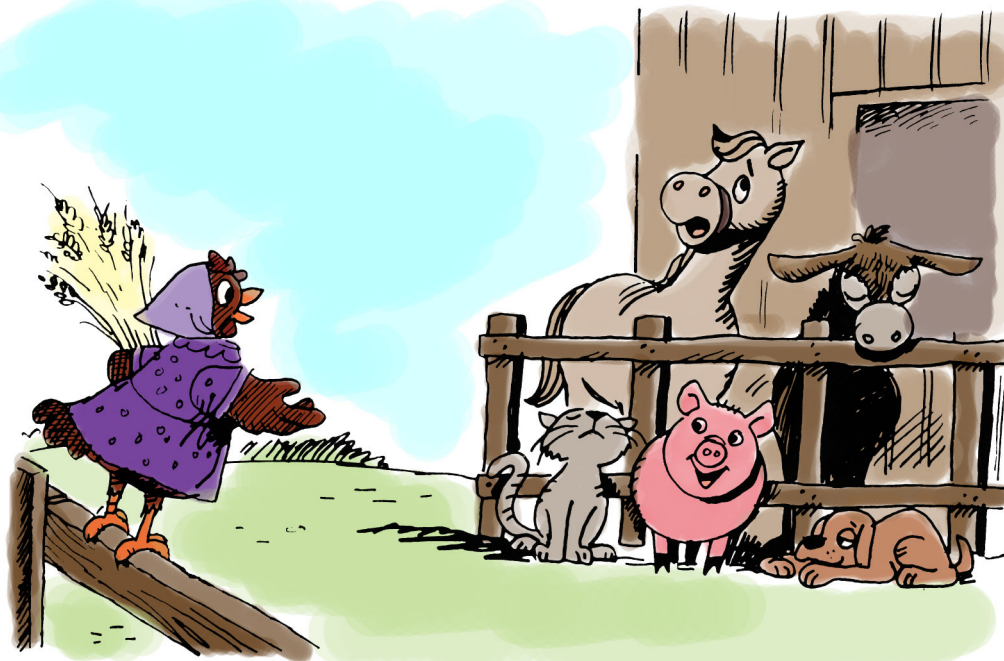
「いやだニヤーン。」と、ネコが。

「やだブー。」と、ブタが。

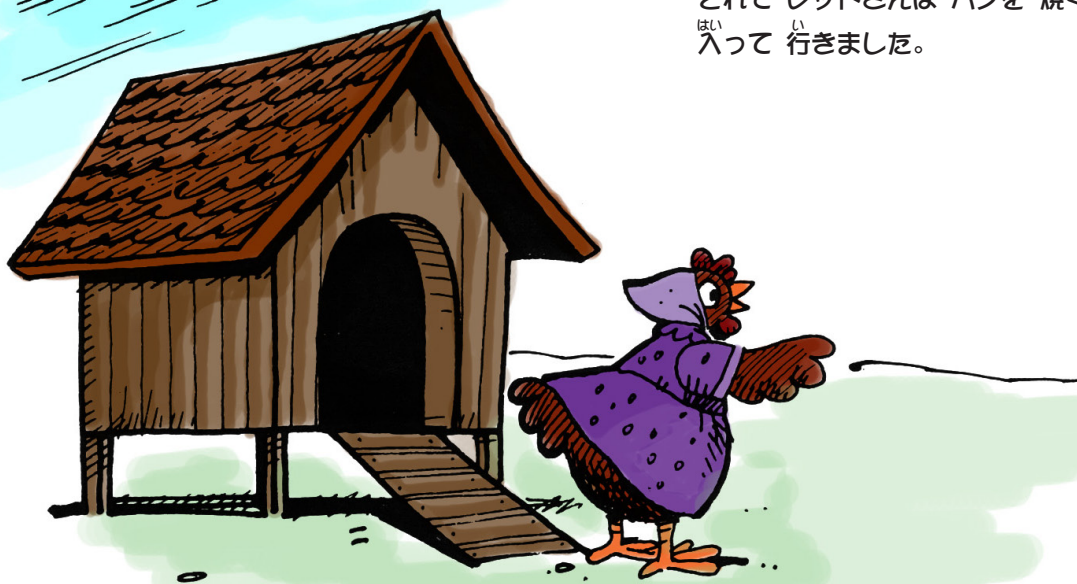
「ワンと 言っても、だめ。」と、犬も 言いました。

「分かったわ。じゃあ、一人で するわ。」と、レッドさん。

脱穀が 終わると、レッドさんは また 納屋に 行って、言いました。「パンを
作る ことにしたの。それで、麦を ひいて 粉に したり、パン種を こねるのを
手伝ってくれる 人、いないがしら？」



すると 今度も、だれも 手伝いたがりませんでした。
それで レッドさんは パンを 焼くために、自分の 小屋に
入って 行きました。



そして とうとう、焼き上がった
パンの 香ばしい においが 辺りに
ただよって きました。レッドさんは
こんがり と 焼けた パンを 持って、
納屋に やって きました。「ねえ、
見て。こんなに おいしそうに
焼けたのよ！ この 焼き立てパンを
食べるのを 手伝ってくれる 人？」と、
レッドさんは 大声で 言いました。



すると、納屋の動物たちが いっせいに
声をあげました。「はい！」

ところが、レッドさんは 言いました。「あら、そんなはずは
ないわよね。だって、手伝ってほしいって 言うたびに、
だれも 手伝って くれなかったもの。だから、
これは わたし一人て 食べる ことに するわ。」

レッドさんは バンを持って 自分の 小屋に もどり、
神様の 供給と 世話を 感謝しました。

納屋の動物たちは、レッドさんの 言葉に ショックを 受け、
悲しく なりました。「パンが もらえない こと なるって
わかってたら、最初から 手伝ってたのにヒーン。」と、
馬が 言いました。

「レッドさんが 手伝って と言った 時に、『はい』って
言えば よかったわ。」と、ロバも 言いました。

「大変だにや、大変だにや。」と、
ネコが つぶやきました。

それからという もの、納屋の 動物たちは、
頼まれると 喜んで 手伝うよう になりました。



あなたは、何かを 頼まれた 時、一生けん命に 手伝いますか？ 大変な
仕事は 時間が かかるし、いつも 最高に 楽しいという わけじゃ ないけれど、
自分に できる お手伝いをするのは、大切な ことです。仕事を 作る ことは
できなくても、食たくの 準備を 手伝ったり、食後の 片付けを 手伝う ことは
できますよね。庭の 手入れの 仕方は 分からなくても、外で 遊んだ 後に
おもちゃを 片付ける ことは できるでしょう。お手伝いできる ことは、
たくさん あります。

喜んで お手伝いする ことを 伝えるために、あなたは 何を しますか？

